

みんな違っていいじゃない

# 親子いろいろ

親子の縁は、特別なもの。

選べないうえに、代えも利きません。

でも、ひと言で親子といつても、

そのあり方はじつにさまざま。親子同士、

外見や性格などよく似た場合もあれば、

正反対のこともあります。

助け合い、認め合い、信頼し合う

三組の親子に話を聞きました。

構成・文●大西展子 写真●宅間國博

ヘア&メイク●alco (Roops) P.24~27



親

志茂田景樹

(74) 作家

子

下田大気

(38) タクシー運転手



カ

ラフルなヘアスタイルと奇抜なファッションで注目される作家・志茂田景樹さんの次男・大気<sup>ひろき</sup>さんは、いまやカリスマタクシー運転手として脚光を浴びる存在だ。さまざまな職業遍歴を経て天職ともいえる職業にたどり着いた二人に、今だから話せる胸の内を語り合ってもらった。

「大気はぼくが直木賞を受賞したと



親子たけど、変に  
ベタベタしない存在、  
仲間のようない  
気分で見ている

きは四歳だったし、長男の順洋よしかずが生まれたときもすでにフリーライターをしていたから、子どもたちは父親は活字の世界の人間なんだという認識だったんじゃないですかね。だからぼくが昔、職を転々としていたことはぜんぜん知らないと思います」「まったく知らないな。仕事部屋に入ると原稿とか鉛筆がいっぱい置いてあったから、あ、なにか書く仕事をしているんだなと思ってたぐらい」

### 失敗しても温かく見守る

この日の撮影は志茂田さんの事務所のある東京・麻布十番の公園。子どもたちが走りまわるなか、大柄な親子（身長百七十八センチと百八十四センチ）はやはりめだっていた。が、二人でブランコに乗っている様子は樂しげで、見ていてほのぼのとしてくる。

「公園で遊んでもらった記憶はないけど、授業参観とか学校行事に来てくれたときは長身でおしゃれだったから自慢の父親でした」

長男の順洋さんは、有名人の子ともと言われるのを嫌がり父親のことを隠していたが、大気さんはむしろメリットと受け止めていたという。「長男は子どもの頃から、どちらか



父親というくくりではなく  
一人の男として捉えています



自分が親になったら、自由に  
やらせようと思っただけです

という内気ではにかみ屋。今も思慮深いところがありますけど、大気はその逆だと思えますね」

志茂田さんが息子たちの性格を分析する横で、大気さんは「ぼくは活発というか社交的、ものおじしない感じですね。だから、けっこうおおっぴらに父親を利用してましたよ」と、ニヤリ。そんな言葉を裏付けるように高校時代、父親といっしょにバラエティー番組に出演。その後、役者の道に足を踏み入れたこともあったが、長続きはしなかったようだ。「学校推薦で入れる系列の大学への進学も、出席日数が少なくてできなかった。だったら、高校時代に渋谷の学生パーティーを何度も成功させた経験もあるんで、大学へは行かずに青年実業家になろう、と」

卒業してすぐに健康食品を扱う会社を立ち上げるも、結局うまくいかず一年後には手を引いた。

「大気は結果を急ぐところがあるんだよね。でも、失敗してそこから学べばいいわけで、ぼくは子どもたちがやりたいことにあまり反対はしません。というのも、ぼくは上が女ばかりのきょうだいの末っ子で、両親に溺愛され育てられ、小学校の遠足に親父がついてきたりして恥ずかし

しもだ・ひろき

1976年東京都生まれ。健康食品会社、芸能プロダクションの経営などを手がけ、2009年からはカリスマタクシー運転手として活躍中。著書に、『タクシーほど気楽な商売はない！あなたにも今すぐ始められる悠々自適の年収800万円ライフ！』がある。



しもだ・かげき

1940年静岡県生まれ。保険調査員などを経て、76年『やっそこ探偵』で小説現代新人賞を受賞し、作家デビュー。80年『黄色い牙』で直木賞を受賞。『なんで!?! 納得できない…14歳のきみたちへ』など著書多数。「よい子に読み聞かせ隊」隊長として全国で読み聞かせもする。

い思いをしたんです。だから自分が親になったときは、なんでも自由にやらせようと思っていたんですよ」

どんどんいい方向へ  
変わっていく

志茂田さんが直木賞を受賞してから生活は一変。その後、十年ほど愛人宅を転々としながら執筆をするなど自宅にはあまり帰らず、母子家庭のような生活だったという。

「お母さんは厳しかった。すごくヒステリックで感情がもろに出るんです。だから、理不尽なことでしたかれたり、ファミコンを壊されたり。いま思うと、夫婦関係のストレスをばくにぶつけていたんでしょう」

「そうかもしれないな。価値観の違う子ども側から見れば、理不尽なところと多いいんですよ。大気、そうとうとばつちりを受けたんだね」

「いろんなことがあったけど、お母さんはお父さんの悪口だけは言わなかったんです。だから、ぼくは父親にたいして、いい印象しかありません。ファッションが変わったときも、違和感はなかったです」

友人にももらったマリリン・モンローの顔がプリントされたタイツを興味本位ではいてみたのが、現在のド

派手な志茂田ファッションの原点だ。「作家になるとふつうのサラリーマンより自由が利くし、好きなことができる。人に迷惑をかけなければ、もっと自分を解放させたいという気持ちが出てきたんですよ」

一方、大気さんはその後も宝石の販売、芸能プロダクションやバーの経営を手がけたがうまくいかず、二十四歳のときに二千万円の借金を抱え自己破産した経験を持つ。その後、タクシー運転手をしていた先輩の紹介で、三十三歳で今の道に入った。

「ほんとうに二十代のときの経験は、すべて今の仕事のためにあったんじゃないか、と。とにかく一か月の乗車上限時間が決められているので、最高で十三日しか労働できず、逆に十七、八日が休日なんです。ぼくは一気に働いて一気に休むのが好きなので、すごく性に合ってますね」

「ぼくも二十数種類の職を転々としたけど、保険調査員時代に初めて作家を志す気持ちが芽生えた。大気もやっとな職を得て、今は水を得た魚のようにだね。ただ、ちよつとうまくいくといつもよけいなことに手を出す癖があるから、タクシーに特化したビジネス一本でいいかな」と稼いだお金をラーメン店経営につ

ぎ込んで潰す大気さんに、苦言を呈することも忘れない。志茂田さん自身は、夫婦で「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国で読み聞かせ行脚をしている。さぞや、母親の光子さんもひと安心なのでは？

「ぼくも兄も独身なのが、唯一の悩みでしょうね。でも、家族を持つと守りに入ってしまうので。だから、今は父親が家にあまりいないで自由にしていく頃の気持ちもわかるんですよ。ただ、実家の玄関に、センサーで反応して言葉をしゃべる赤ちゃんのおもちゃが置いてあるんですよ。早く孫の顔を見せなさいというアピールかもしれない」

さて、いま、おたがいはどんな存在であるのだろうか。

「血を分けた親子ではあるけれども、変にベタベタしない存在、ときどき仲間のような気分で見ているところがある。これから大気がどう変化していくのか、どんどんいい方向へ変わっていくのかもしれないな」と「あまり父親というくくりでは見なくて、一人の男として捉えています。やっとな三十を越えて、地に足の着けられる仕事に出合えたので、もつこの業界で大きくなっていくこと、それが親孝行だと思っています」